OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	リチャード・チェイスのもうひとつの顔 : 冷戦の時代とアメリカン・ロマンス論争
Author(s)	里内, 克巳
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2001, 2000, p. 23-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77294
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

リチャード・チェイスのもうひとつの顔

——冷戦の時代とアメリカン・ロマンス論争——

里　内　克　巳

1. はじめに——論争の見取図

アメリカ文学史における「ロマンス」の伝統を論じて一世を風靡したリチャード・チェイスの『アメリカ小説とその伝統』（1957 年。以下『伝統』）に対する評価は，近年劇的に変化した。この 20 年ほどの間に，アメリカでは社会的な問題意識を強力に押し出した新しい世代の研究者たちが次々に登場した。これらの研究者の関心は多岐にわたるものの，これまで権威と見なされてきたアメリカ文学・文化論を批判的に見直すことによって，その活力を維持していることが共通点として指摘できる。なかでもアメリカ小説論の古典として定評のある『伝統』は，彼らにとって格好の批判の対象であるようだ。

チェイス見直し論は 1980 年代後半から 90 年代初めにかけて集中して出てくるのだが，一口で述べるならば，作品や作家を取り上げる際に歴史的・政治的な文脈が無視される傾向を指摘するものが主流を占める。そのなかでも細かく見ていくと，ハウエルズやドライサーなどリアリズム文学の伝統が軽視されていることを論難するもの（エミイ・カプラン），『伝統』のなかで取り上げられている作家たちのほとんどが自分の作品を「ロマンス」とは規定していなかったことを示し，更にチェイスが目を向けようとしなかった歴史ロマンスの豊かな鉱脈を指摘するもの（ジョン・マクウィリアムズ），チェイスが『リベラルな想像力』などで知られるライオネル・トリリングと同じ左翼的知識人であったことに注目し，第二次大戦後の冷戦構造の中で，彼らの立場が微妙に右傾化していくことが，「ロマンス」としてのアメリカ小説規定に影を落としているとする見方（ジェラルディン・マーフィ）などに分かれる。このなかで最後に挙げた論点こそ，マーフィのみならずカプランやラッセル・ライジングらも口を揃えて指摘する，最も重要なものだと言える。この論争が文学研究というよりむしろ旧来のアメリカ研究への批判という側面を持ち，更にはかつての「リベラル」知識人に対する政治的闘争の性格を帯びている理由はそこにある。そして，上に挙げた批判のほぼ全てにドナルド・ピーズが何らかの形で関わっており，彼らが俗に「ニュー・アメリカニスト」と呼ばれているのは周知の通りである。

とはいえ，「ニュー・アメリカニズム」という俗称が初めて使われてから早くも 10 年以上が経過した現在，チェイスに対する研究者たちの反応は，もはや批判だけに終始しているのではないことには留意する必要があろう。例えば，1999 年に上梓されたトンプソンとリ

ンクの共同研究は，チェイスが指摘した「ロマンス」の伝統を基本的に認める方向に敢えて論を進め，政治的な立場意識をことさらに強調する「ニュー・アメリカニズム」に対抗して，「新伝統主義」(New Traditionalism)を旗揚げしたのだった。今チェイスについて何かを語るということは，とりもなおさず，以上のような最近の毀誉褒貶半ばする反応の数々と，根気づよく対話を行なうことにほかならない。この小論のねらいは，第二次大戦後のアメリカ文学研究を方向づけた批評家リチャード・チェイスの評価を巡るこれまでの論争の流れを整理しつつ，今後の動向を見定めることにある。

2.「ロマンス」と「矛盾」——『伝統』の問題点

私の『伝統』に対する考えは，条件つきながら，修正派の論者たちによる批判と共通するところがあるのだが，まずはチェイスの著書を単独で俎上に載せ，その問題点をいくつか指摘しておきたい。第一に，反リアリズムとしての「ロマンス」というメイン・アイディアで個々の作品が本当にうまく説明されているのか，という基本的な問題がある。チェイスは「ロマンス」を定義する際に，あくまで具体的な現実を抽象化したうえでの「ロマンス」という見方を示し，感傷小説などのポピュラー・フィクションを想起させる一般の捉え方とは切り離す。だがこうした定義の仕方自体がいささか抽象的なのであって，具体的にそうした「ロマンス」の要素が作品のどのような部分に現れてくるのかを，多くの場合チェイスは十分に指し示すことができない。例えばチェイスによれば，この現実から出発するロマンスという方向性は，ジェイムズ・フェニモア・クーパーの「レザーストッキング」五部作の性質が，リアリズムから神話的なものに移行していくことなどに顕著に表われているという(Chase 1957 *Tradition* : 56)。だが，例えば五部作の中間に位置する『大平原』(*The Prairie*)のような個々の作品のなかで，どの部分がリアリズムでどの部分がロマンスなのかを，曖昧な言葉でしか指し示すことができないために，読み手は肝心のところではぐらかされた印象を持つことになる。

このような説得力のなさは，チェイスが南北戦争後の作品を扱うに及んでますます顕著になってくる。例えばチェイスが『ある貴婦人の肖像』をヘンリー・ジェイムズ自身の作品群のみならず他のアメリカ小説を計る基準として捉え，これだけで一章を設けたのはよく理解できる。快活で理想家のイザベル・アーチャーが結婚後，冷徹な現実に目覚めていくという筋立てのこの作品ほど，「ロマンス」と「現実」との対立関係が明確に分かる作品はないのだから。しかしながら私見では，この小説をはじめ南北戦争後のリアリズム・自然主義小説は，提示された「ロマンス」的なヴィジョンを否定することによってその現実味を獲得しているのであり，しかもそのときの批判の対象となる「ロマンス」とは，多くの場合が感傷的な大衆小説なのである。これは現実を抽象化したロマンスというチェイスの考えとは明らかに食い違う。メルヴィル論までのチェイスの記述が相対的に緻密で，日本でも彼の論を受けた研究の収穫が多いのに比較して，ジェイムズ論を過ぎてからのチェイスの筆致があまり冴えず，いたずらに粗筋をたどったり，他の論者の意見を並べたりするだけに終始

してしまう印象を強めるのは，現実から析出されたロマンスという抽象的な考えが，具体的な作品分析に当てはめにくくなってくるためだ。近年になって，リアリズム・自然主義小説の良さが見直されるようになったり，感傷小説や歴史小説といった実際の「ロマンス」を掘り起こして，それとの比較で既にキャノン化された作品を論じるようになったのは，ある意味でチェイスの論に対する反動であるが，けだし当然の成り行きであると言える。

「ロマンス」という語の曖昧さに加えて，チェイスが展開する論理の危うさという，別の問題点も挙げなければならない。『伝統』を批判したおそらく最初の論者であるロバート・スピラーは，『アメリカ文学』誌上で次のような指摘を行なっている。「…チェイス氏のやり方は，ある文学形式の歴史的進展に関する仮説として機能する命題を提示することだ。それから彼は，この形式を持った主要アメリカ作家が書いた最良の作品だと自分が考えるものを，ごくわずか選び出す。そしてそれらのテクストに命題をあてはめることによって分析を行なう。…かくして彼は，循環論法によって，初めからあった命題が有効であることを読者の側に徐々に確信させてゆく。したがって彼は，自分の論の正しさを証明するというより，むしろ擁護しているのだ。」(Spiller 1959: 82)　議論が循環している，というスピラーの意見に，私もほぼ同じ思いを抱く。チェイスの議論の立て方は，基本的に帰納的ではなく演繹的なのだ。彼はまずアメリカ文化のなかにある解消されざる様々な「矛盾」を挙げ，文学にも同じことが言えるとする。そのうえでその矛盾を体現していると自分が考える作品を選び出して論じるのだが，その過程で最初に立てた前提が厳密に吟味されることは，実のところほとんどない。

『伝統』の魅力のひとつが，個々の作品の丁寧な読解にあることは誰しも認めるところであろう。チェイスは新批評(New Criticism)とは一線を画しながらも(Chase 1957 *Tradition* : 70)，それをうまく取り入れているところがある。かなり早い時期から精緻で分析的なアメリカ小説の読みを実践した研究者として，チェイスを再評価することも可能だろう。しかしそれでも，彼が目指したことの意義をそれだけで完全にすくい取ることができるのか，疑わしい。敢えて言うなら，新批評的な方法論が本領を発揮するのはあくまで部分的なものであり，論全体のかなめである「ロマンス」や「矛盾」のテーマの説得力を強めるのには，必ずしも寄与しない。作品論を寄せ集めたかのような章構成は，『伝統』全体を評価する上での十分な決め手とはなりえないばかりか，個々の作品相互の連関や歴史的な把握を困難なものにするという結果も招いている。作品の緻密な読解という観点をあくまで突き詰めていけば，皮肉にも肝心の『伝統』の主題自体を廃棄することになりかねない。したがって「ロマンス」や「矛盾」といった主題は，素朴な作品論的観点とは全く異なった角度からすくい上げるしかないのである。

3.　ニュー・アメリカニズムの「ロマンス」

ここで，チェイスの論をトリリング経由の文化批評と捉え，それを冷戦期の政治的な文脈に組み込んで読むという，「ニュー・アメリカニズム」のいわば心臓部である発想を今一

度検討し直す必要がある。本来ならば，ドナルド・ピーズが批評誌『バウンダリー２』の序文に書いた有名なマニフェストを取り上げるべきなのかもしれないが，ピーズの論はアメリカ帝国主義への批判や60年代以降の文化状況への考察などに拡散していくところがある。そこでここでは，冷戦の時代である50年代とチェイスという一点に絞って問題を考えるために，先にも触れたジェラルディン・マーフィの論考「中心をロマンス化する――冷戦の政治学と古典アメリカ文学」(1989年) を概観してみたい。ピーズをはじめとする後続の研究者たちに大きな影響を与えたこの論文は，精緻で良くまとまった論理展開を持ち，「ニュー・アメリカニスト」によるチェイス読解の基本を把握するのに最適だからだ。

まずマーフィは，ライオネル・トリリングをはじめアーヴィング・ハウ，シドニー・フック，ダニエル・ベル，アーサー・シュレジンガーといった 50 年代アメリカの様々な学問分野において主導的立場にあった，いわゆる「ニューヨーク知識人」とチェイスを同列に置く。ニューヨーク知識人は60年代まで自らを左翼と規定していたのだが，実際にはその思想的立場の推移は，初期の共産主義からトロツキズム，反スターリニズムを経て新保守主義に至る，右傾化の流れを明らかに示していた。マーフィによれば，この政治思想の変化は，アメリカ文学・文化研究の傾向と密接に連動している。30年代の「人民戦線」(Popular Front) 全盛の時期には社会主義的な「リアリズム」小説に脚光が当てられ，V. L. パリントン (Vernon L. Parrington)の『アメリカ思潮史』(*Main Currents in American Thought*, 1927-30 年)のような左翼的な歴史観に基づいた大部の文学史が書かれた。それに対して東西冷戦・全体主義の脅威という政治的背景を持った50年代の知識人ならびに文学研究者たちは，非政治的（というよりも，むしろ非左翼的）で高踏的なモダニズムに関心を寄せ，それによってアメリカの文学を左翼の文化領域から奪還しようとした。そのような保守的な文芸批評の動きを最もよく体現する人物がライオネル・トリリングである。その主著『リベラルな想像力』の巻頭を飾るエッセイ「アメリカの現実」(“Reality in America”)においてトリリングは，主観によって変化することのない不変の実体として現実を捉える，パリントン流の素朴なリアリズム観を攻撃しただけでなく，セオドア・ドライサーのような社会的な問題意識の濃厚な文学者も否定し，それに代わって，不透明な個人の意識という媒体を通した現実，という考えを提示することになる。

しかしながら，このように保守的な政治観とモダニズム文学とを等号で結んだからといって，同じようにモダニズムを支持するニューヨーク知識人と新批評の論者たちとの違いが存在しないわけではない，とマーフィは釘をさす。T. S. エリオットやジョン・クロウ・ランサムらの新批評は，文学作品の内容よりも形式に客観的分析の光を当て，歴史性を最も効果的に抑圧できる詩のジャンルに特権性を与えた。そのことによって新批評の論者たちは，世間と没交渉的な大学という制度のなかで大きな力を発揮することができた。それと比較すると，ニューヨーク知識人は概してよりロマンチックな気質を持ち，テクストとその歴史的文脈との関係も視野に収めようとするため，既存の大学制度とは微妙に距離を保つ傾向がある。 かくしてニューヨーク知識人の批評的立場は，左翼の支持するリアリズム

と，新批評（保守）の支持するモダニズムの中間に位置することになる。もちろん，彼らが保守化して大学制度内に取り込まれていくにつれて，モダニズム批評内部のこうした差異は徐々に解消されていくことになるのであるが。

かつてアメリカ・ルネサンスの作家ナサニエル・ホーソーンは，「ロマンス」を現実と非現実とが相互に侵食しあう「中間地帯」と規定した。そのことを想起するならば，「ロマンス」というジャンルは，上記のような文化的にも政治的にも「中間」を志向するニューヨーク知識人の立場を，最も適切に表現するものであると言える。なぜなら「ロマンス」は，30 年代アメリカを席巻した共産主義と結びついた「リアリズム」＝「ノヴェル」に対抗する概念として機能するだけではなく，科学的な分析を建前とする一方で保守的な土壌から生まれた新批評の文学観とも袂を分かつことができるからだ。ここから更に踏み込んで，「ノヴェル」と「ロマンス」の対立図式に東西冷戦という国際的なレヴェルでの政治の影を読み取ることもできるだろう。すなわち，「開かれた」形式を持った「ロマンス」は，そのなかに多様性・異質性を包含する柔軟さを持つため，アメリカ民主主義の暗喩としての役割を果たすことができる。その反対に，ミメーシス（模倣）の原理に基づく「ノヴェル」は，首尾一貫した（言い替えると「閉じた」）構成を目指すため，ソヴィエトの全体主義や体制順応的な心性を表現するものとして機能する。このように考えると，チェイスの「ロマンス」は，冷戦を背景にして保守化した自称左翼知識人の政治観の産物であると読むことが可能になる。

以上のようにチェイスの「ロマンス」を新たな角度から検討し直すマーフィの論考は，旧来の文学研究と知識人論＝思想史(intellectual history)とを結合させる試みで，他の「ニュー・アメリカニスト」たちの多くが追随するものとなった。「ロマンス」を政治化していく際の論理のプロセスに強引さがないかどうかという点については，やや慎重な検討を要するものの，これが斬新で練り上げられた論であるという評価は揺るがないだろう。ただし，論の技術的な巧拙に先立って，チェイスがはたしてニューヨーク知識人の仲間であったのかどうか，トリリングのチェイスへの影響は実際にはどのようなものだったのか，という基本的な疑問点があり，そうした疑問に対して，マーフィをはじめとする修正派の論考はあまりに手薄であることを，私は指摘しておきたい。近年徐々にその数を増やしつつあるニューヨーク知識人に関する通史を渉猟しても，リチャード・チェイスの名前は記載すらされないこともあり，50 年代に保守化したとされるトリリングとチェイスとの具体的な関わりについて，私たちは現段階ではほとんど知ることができない。奇妙にも指摘されることがないこの点こそ，「ニュー・アメリカニズム」という批評運動の大前提に潜む，論理のアキレス腱なのである。

急いで付け加えるならば，ほぼ同じ時期にコロンビア大学の教師になったトリリングとチェイスとの関連性が指摘されるのは，これが初めてではない。例えば，旧世代のアメリカ文化研究を代表する人物としてチェイスと同じく批判の標的にされるレオ・マークスは，その主著『楽園と機械文明』(1964 年)の末尾近くで，トリリングが「アメリカの現実」においてパリントンを批判する際に述べた「文化とは水流のようなものではなく，ましてや流れが集

結するところでもない。文化の存在様式は闘争であり，少なくとも討議である…それは弁証法的なもの以外の何物でもない」(Trilling 1950: 9)という有名な一節を引用したうえで，このような対立的なものから構成される文化という概念から，チェイスは「矛盾」のアメリカ文化という独自の考え方を練り上げたのだ，と指摘している(Marx 1964: 341-2)。このように，第二次大戦後のアメリカ文学・文化研究の背後にトリリングがいるという考え方を，その実践者のひとりも表明しているという事実は，「ニュー・アメリカニスト」の主張を強力に裏書きするものではある。しかしそれでも，『伝統』にはトリリングへの言及がほとんどなく，冷戦をはじめとする政治的・社会的なコメントも皆無であるのは，やはり気になるところだ。マーフィの論考は，ニューヨーク知識人一般の文化的・政治的立場について多くの紙数を費やす反面，皮肉なことに肝心のチェイスその人については，ほとんど触れないで済ますという問題点を抱えている。彼女や他の論者たちが書いた，チェイスの「政治性」をことさらに強調する文章を読めば読むほど，チェイス自身のアメリカの政治や社会に対する関心をより具体的に示すものを確認できないものか，と感じてしまうのである。

4．社会批評家リチャード・チェイス

チェイスの文学研究にしか馴染みのない者にとって，その業績を政治的な観点から見直そうとする「ニュー・アメリカニスト」たちの試みは，強引かつ不穏極まりないものに思えようが，私は今回『伝統』出版前後のチェイスの仕事を詳しく調べてみて，必ずしもそうとは言いきれないという感触を持った。『伝統』はそれだけで完結したテクストではなく，チェイスの他の著作と密接な関わりを持っている。そのことは，この時期のチェイスが雑誌に寄稿した原稿を元にして自作をまとめあげるというプロセスを踏んでいる，その事実を丹念に追っていくならば自ずと明らかになってくることなのだ。

チェイスは 1955 年 4 月に『ウォルト・ホイットマン再考』を上梓するのに先立って，そのパイロット版である「アメリカの代弁者としてのウォルト・ホイットマン」という論考を，雑誌『コメンタリー』3 月号に発表する。この論文の中でチェイスは，従来の「民衆のための」作家という一義的なイメージで捉えられてきたホイットマン像を否定し，ホイットマンの作品や人物像のなかではラディカリズムと保守思想という相矛盾する政治性が緊張関係を孕みながらも共存している，と論じる。そしてこの詩人がアメリカの代弁者であるとなおも見なせるならば，それはアメリカ文化・社会の持っている諸矛盾をこの人物が一身に体現しているからに他ならない，と結論づける。更に同誌 7 月号にチェイスは「文化に中道はあるか」を発表する。これは書評の体裁を取った論考で，イギリスの民主主義において支持されている「中道(Middle Way)」という態度をアメリカが導入する際には，政治的なレヴェルにおいては有効であっても，それを文化的なレヴェルに持ち込むことは危険である，と警告するものだ。アメリカに特徴的な分裂した政治的・文化的態度を提示した前回のホイットマン論からの連続性は明らかだが，更に留意しなければならないことは，これがアメリカ文化の「矛盾」を孕んだ性質を論じた二年後の『伝統』の序論「壊れた回路」(“The Broken

Circuit")に生かされることになる，という点である。

チェイスは引き続いて『伝統』出版前後に，「ミドルブラウ・イングランド」「アメリカ小説におけるラディカリズム」「今日のラディカリズム――ある対話」「新保守主義とアメリカ文学」「背信と現代文化」「アヴァンギャルドの運命」といった一連の書評・論考を発表する。発表した雑誌は，ほとんどが『コメンタリー』だが，『パルチザン・レビュー』に二編，『ディセント』には一編寄稿している。よく知られているように，これらは発刊年や編集スタンスなどの違いこそあれ，いずれもニューヨーク知識人が拠点とした雑誌である。とりわけ 1945 年に発刊された『コメンタリー』は，年とともに体制に妥協する姿勢を強め，反共イデオロギーを唱える新保守主義の牙城となったことには注意が必要だ（堀 2000: 224-236)。以上挙げたホイットマン論から始まる 8 本の雑誌掲載論考すべてに加えて，『伝統』の一部も取り込んで，チェイスはホイットマンの有名なエッセイからその標題を借りた『民主主義の展望』を 58 年に上梓することになる。このような経緯を考慮に入れるならば，ほぼ同時に書きあげられた『伝統』と『民主主義の展望』はいわばセットになっており，後者の論述に照らして考えるならば，前者の核心が実は「ロマンス」というより，むしろそれが内包している「分裂」「矛盾」といった対立のヴィジョンにあること，更にこのヴィジョンこそ，チェイス自身の民主主義観と直結するものであることが，より明瞭になってくるのである。

チェイスはこの対話体のアメリカ文化論のなかで，『伝統』の序章で提示した「分裂」のヴィジョンを，アイゼンハワーが大統領の座に就く 50 年代アメリカ社会との関係で更に掘り下げている。戯曲の形式を持ったこの本のなかで，チェイスは自らをラルフ・ヘッドストロング(Ralph Headstrong)という皮肉な名前を持った大学教授として登場させ，様々な思想的背景を代表する男女と議論をたたかわせる。ラルフは 30 年代の社会変革思想（ラディカリズム）の洗礼を受けた人物で，50 年代の体制順応的な社会のあり方に不満を抱いている。そしてこのような 50 年代という時代は，アメリカが成熟・完成に達した時代ではなく，より急進的な改革による未来の構築に向けて社会が動き出すまでの暫定的な期間にすぎないとする。これに対して 50 年代のアメリカ人一般の心性を代表する人物が，一世代下のジョージ・ミドルビイ(George Middleby)である。この若者はその名が示すように政治的・文化的に「ミドルブラウ」を志向する，現状に満足した同時代のアメリカ人を代弁する人物として設定されている。アメリカ社会における文化的・政治的な緊張関係を回復させようと考えるラルフと，そのような対立をなし崩しに解消して平穏な日常に埋没してゆくことを望むジョージとの対話が，『民主主義の展望』において極めて重要な位置を占めている。

ただし留意しておかなければならないのは，ラディカリズムを唱えるラルフにしても，自分の主張が今や時代錯誤的な性質を帯びてしまっていることを十分認識しているということだ。ラルフは結婚して家庭を持ち，妻に代わって赤ん坊のおむつを洗ったりする生活を送っている。かつて在野で発言した知識人たちは結婚しても子供をつくらない覚悟があったのに比較すると，今日の自称知識人は大学に奉職することによってしか生活する手立てがなく，しかも他の人々と同様に郊外で家庭生活をおくるまでに堕落した，と自嘲気味に

ラルフは語る。戦後になって大学制度自体が変質し，大学人が一種のビジネスマンと化してしまったことにもラルフは批判の目を向け，大学はより社会に向けて開かれるべきだと主張するジョージに反論して，マスメディアの発達によって高度に大衆化した社会から距離を置くことによってのみ，大学の存在意義は保証されるのだと切り返す(Chase 1958 *Vista* : 25)。このように本書全体を通じてチェイスは，政治的・文化的な「ミドルブラウ」を拒否して，「ハイブラウ」「ローブラウ」という差異――チェイスはこの区別を，1910 年代に主として活躍した文芸批評家 V. W. ブルックス(Van Wyck Brooks)から借用している――をアメリカの社会や文化の中に回復させるべきだという主張を行なっている。しかしながらラルフの主張がしばしば皮肉な響きを帯びるのは，こうした試みは現状では必然的に負け戦になることをチェイスが十分知り抜いているからである。『民主主義の展望』という評論が，戯曲という特異な形式をとる理由も，ひとつにはそこにある。ジョージをはじめとする他の登場人物たちとラルフとの議論は，多くの場合，決着をみず，ラルフが自らの主張を一歩譲って相手の側に歩み寄ることもしばしばある。

このように『伝統』前後のリチャード・チェイスの仕事を丹念に追っていくならば，学究肌の文学研究者という，現在の私たちが通常抱くであろうイメージとはかなり異なった姿を私たちは見出すことになるだろう。歴史的な文脈を掘り起こす作業によって現れてくるチェイスの相貌は，『孤独な群集』(1950 年) のデイヴィッド・リースマンや，『イデオロギーの終焉』(1960 年) のダニエル・ベルなどのニューヨーク知識人と関心を少なからず共有する，同時代社会に関するコメンテーターとしての側面なのである。そうであるなら，例えばテレビや映画の普及によって地位の低下した文学，そして大量消費社会のなかで大衆化していく象牙の塔を目の当たりにしてチェイスが抱いた危機感を考慮することなく，アメリカ小説の本質は「ロマンス」であるのかどうかという議論を果てしなく行なうことに，はたして意味はあるのだろうか。文学評論の体裁をとった『伝統』ですら，社会評論家チェイスというもうひとつの顔を知っておかなければ，本当の意味で理解できないのではないだろうか。マーフィやピーズら修正派論者が突きつけているのは，結局のところ，私たちはこれまで『伝統』の文化論的な構えやチェイスその人についてあまり興味を持ってこなかったのではないか，という問いなのであって，狭義の文学研究を守ろうとする者であっても，その問いかけを真剣に受け止める必要がある。一方，私が調べた限りでは，チェイスの他の著作に言及した「ニュー・アメリカニスト」の論者が一人もいないのは奇妙なことだ。この事実は，彼らには理論偏重のきらいがあり，チェイスの書いたものに即して考えるという基本作業を怠っていることを示している。それをもし行なったならば，「冷戦」という一語に簡単に回収されることを拒む，チェイスの一筋縄ではいかない思考の営みが見えてくるはずなのだ。

5．新伝統主義 ,そして――

『伝統』をチェイスの他の著作や彼の生きた時代との関連で捉えなおそうとする方向性

は，小論の初めに触れたトンプソンとリンクの共著『中間地帯——新伝統主義とアメリカン・ロマンス論争』(1999 年) のなかで，既にその端緒が現れている。この研究書はこれまで行なわれてきたチェイス批判の数々とは趣を異にしており，アメリカ文学批評史を実証的に辿り直すことによって，アメリカにおける「ロマンス」の伝統を指摘した批評家は何もチェイスに始まるわけではなく，19 世紀後半にもそのような主張が存在していたこと，そして「ノヴェル」と「ロマンス」という切り分け方が，長きにわたって文学を実践・理論両面から形作ってきたことに，私たちの注意をあらためて喚起する。そしてイデオロギー的な理由から「ロマンス」の伝統が捏造されたと主張するのは，歴史的な事実を無視ないしは歪曲することに他ならないとし，ピーズをはじめとする「ニュー・アメリカニスト」の過剰な政治性を厳しく糾弾する。その一方でトンプソンとリンクは，チェイスの提示した「ロマンス」の概念があまりにも狭すぎたことを認め，実際にはジェンダーや人種などの点で多様なあり方を示していたアメリカン・ロマンスの「伝統」を再確認することを提案したのだった。

この共著のなかでトンプソンとリンクは，20 年近くに及ぶアメリカン・ロマンス論争のなかで，おそらく初めて『民主主義の展望』を部分的にだが検討の対象にした。ただし彼らは，「ニュー・アメリカニスト」を批判するためにのみ，このチェイスの文化論を利用しており，また『伝統』と『民主主義の展望』の二著作を繋ぐ，数多くの雑誌掲載論考への言及はない。それだけでなく，彼らの論述は「ニュー・アメリカニズム」の理解の仕方に関連して若干の問題点も抱えている。一例を挙げると，『民主主義の展望』のなかにラルフが一世代前の『ケンブリッジ・アメリカ文学史』(*The Cambridge History of American Literature*) と比較して，現在の『合衆国文学史』(*Literary History of the United States*)をこきおろす場面がある。前者が様々な論者が寄り集い，賑やかな不協和音を奏でていたのに対して，後者は寄稿者がお互いに協議を行ない，各自の論を共通の枠組みの中に無理やり嵌め込もうとする，という訳だ (Chase 1958 *Vista* : 63)。この個所は明らかに，同時代のアメリカ文化が均質化することへのチェイスの批判的な眼が感じられるところである。ただし，トンプソンとリンクがこの部分を取り上げて，「コンセンサスに基づく政治やアイゼンハワー時代のミドルブラウ主義を構成する文芸文化をチェイスが唾棄していることと，中道主義でナショナリズムを志向する冷戦期の精神構造とを等号で結ぶことは，チェイス理解を転倒させることだ。彼を『反スターリニスト』とし，更には『保守』の陰謀への加担者呼ばわりすることは，歴史的，そして個人的な記録に大きな暴力を加えることになる」(Thompson & Link 1999: 165-6)と警告するのは，もう少し慎重な検討が必要だろう。なぜなら，先述したマーフィの論考において既に示唆されているように，「多様性」や「矛盾」をアメリカ民主主義の発露として礼賛する態度は，東西冷戦という文脈のなかでは逆に抑圧的な「封じ込め」として機能している，という逆転の発想を修正派論者は用意しているからだ (Suchoff 1992: 151)。その点に狙いを定めて論破しなければ，トンプソンとリンクの提唱した「新伝統主義」は，「ニュー・アメリカニズム」を切り崩すことはできず，両者の主張はなおも平行線を辿るのではないか。

里　内　克　巳

長年にわたるアメリカン・ロマンス論争も，見直し一色に塗りつぶされていた時期から，『中間地帯』の登場によって旧守派が息を吹き返す可能性も芽生えてきた。確かにもともとは文学的な議論が，政治的闘争の色彩でセンセーショナルに染め上げられてしまったきらいがあり，「新伝統主義」の論者たちが主張するように，今は冷静で実証的な議論を地道に重ねていくべき時期なのだろう。ただし，例えば従来の「アメリカン・ロマンス」の枠組みを広げてトニ・モリソンのような黒人女性作家の作品も含むようにすればどうか，というトンプソンとリンクの主張は，聞こえは良いものの，同化主義的な発想の罠に陥って，議論が振り出しに戻ってしまう危険も多分に孕んでいる。私がむしろ提案したいのは，『民主主義の展望』をはじめとする『伝統』前後のチェイスの仕事をよりきめ細かく検討し，政治・文化・文学といったものが彼のなかでどのように繋がっていたのかを，更に実証的に確認していく作業である。過激なやり方と見る向きもあろうが，理論先行で図式的になりすぎる傾向のある修正派の考えを，逆に矯める効果もある。チェイスをはじめとする第二次大戦後の批評家たちを，同時代の社会的・文化的状況のなかに解き放つプロジェクトは，一面では従来の文学研究を解体する方向に議論を進めていくかもしれないが，それが広い意味での文学研究にとって不利な結果をもたらすとは必ずしも限らない。こうした試みの積み重ねが，長い目で見れば，過剰な政治性を離れた文学ならではの価値を析出する結果になるのかもしれないのだ。

*本稿は，『英文学春秋』第 7 号（臨川書店：2000 年）の特集「温故知新」に寄稿した書評に大幅に加筆したものである。以下の参考文献で挙げられていない人名・書名に関しては，必要と考えられるものに限って原名を本文中で示した。

参考文献

Chase, Richard. *Walt Whitman Reconsidered.* London: Victor Gollancz, 1955.

______________. *The American Novel and Its Tradition.* New York: Doubleday Anchor Book, 1957.

______________. *The Democratic Vista.* New York: Doubleday Anchor Book, 1958.

______________. "Walt Whitman as American Spokesman: Some Hindsights and Foresights." *Commentary* 19: 3 (1955): 260-265.

______________. "Is There a Middle Way in Culture?: Clifton Fadiman and the Middlebrow." *Commentary* 20: 1 (1955): 57-63.

______________. "Middlebrow England: The Novels of Kingsley Amis." *Commentary* 22: 3 (1956): 263-269.

______________. "Radicalism in the American Novel: A Reclamation of Values." *Commentary* 23: 1 (1957): 65-71.

______________. "Neo-Conservatism and American Literature: Traditional Impulse and Radical Idea." *Commentary* 23: 3 (1957): 254-261.

______________. "Max Lerner's America: The Middlebrow in the Age of Sociology." *Commentary* 25: 3 (1958): 255-260.

______________. "Radicalism Today: A Dialogue." *Partisan Review* 24: 1 (1957): 45-54.

______________. "The Fate of the Avant-Garde" *Partisan Review* 24: 3 (1957): 363-375.

______________. "Heresy and Modern Culture" *Dissent* 4: 2 (1957): 128-132.

Jay, Gregory S. *America the Scrivener: Deconstruction and the Subject of Literary History.* Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1990.

Kaplan, Amy. *The Social Construction of American Realism.* Chicago: The University of Chicago Press, 1988.

Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America.* New York: Oxford University Press, 1964.

McWilliams, John. "The Rationale for 'The American Romance'." *boundary 2* 17:1 (1990): 71-82.

Murphy, Geraldine. "Romancing the Center: Cold War Politics and Classic American Literature." *Poetics Today* 9: 4 (1989): 737-747.

Pease, Donald E. "New Americanists: Revisionist Interventions into the Canon." *boundary 2* 17:1 (1990): 1-37.

Reising, Russel. *The Unusable Past: The Theory and the Study of American Literature.* New York: Methuen, 1986.

Spiller, Robert E. Review of Richard Chase's *The American Novel and Its Tradition.*

American Literature. 31: 1 (1959): 82-84.

Suchoff, David. "New Historicism and Containment: Toward a Post-Cold War Cultural Theory." *Arizona Quarterly* 48:1 (1992): 137-161.

Thompson, G.R. and Link, Eric Carl. *Neutral Ground: New Traditionalism and the American Romance Controversy*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1999.

Trilling, Lionel. *The Liberal Imagination*. New York: Viking, 1950.

Wilford, Hugh. *The New York Intellectuals: From Vanguard to Institution*. Manchester: Manchester University Press, 1995.

巽 孝之 『ニュー・アメリカニズム――米文学思想史の物語学』東京：青土社, 1995 年

堀 邦維 『ニューヨーク知識人――ユダヤ的知性とアメリカ文化』東京：彩流社, 2000 年